法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-01-11

〈書評と紹介〉村上直・和泉清司・佐藤孝之・西沢淳男編『徳川幕府全代官人名辞典』

道上, 和洋 / MICHIGAMI, Kazuhiro

(出版者 / Publisher)
法政大学史学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
HOSEI-SHIGAKU : Journal of the Hosei Historical Society / 法政史学
(巻 / Volume)
85
(開始ページ / Start Page)
37
(終了ページ / End Page)
39
(発行年 / Year)
2016-03-24

〈書評と紹介〉

村上直・和泉清司・佐藤孝之・西沢淳男編

『徳川幕府全代官人名辞典』

道上　和洋

江戸時代、幕府が各地の幕領の支配を任せたのが代官である。本書は、その書名からもわかるように、代官の経歴などをまとめた辞典である。代官という言葉自体は、例えば「悪代官」などに代表されるように、広く知られた言葉である。しかし、意外なことではあるが、これまでこの代官に関する辞典というのは、ほとんど出版されていなかった。もちろん、伊奈氏や江川氏、あるいは『民間省要』などを記した田中休愚のような有名な代官に関しては『国史大辞典』のような他の辞典類でも記事が立項されているので、そちらで調べることは可能である。しかし、このような有名な人物ではない人が代官を務めていた場合、このような『国史大辞典』に頼ることはほとんどできなかった。また、途中で断絶してしまった家の代官や、一代だけの代官など、まとまった史料が残っていない者も多い。そのため、これまでこのような代官の経歴や実績を調べるにあたっては、『寛政重修諸家譜』に代表される系図類を利用するか、『柳営補任』などの記録類に当たらざるを得ず、ひとつひとつ調査をしていくよりほかになかった。また系図類に関して言えば、編纂後の情報は一切書かれていないため、特に幕末などの代官の情報を得るのは様々な調査を行う必要があり、たいへんな時間と労力を伴うことであった。また、各『武鑑』で調べる方法もあったが、民間でまとめたもののため誤謬も多く、掲載されている情報がその時期に正しいものであったのか判断をする必要があった。もちろん、本書の編者でもある和泉清司氏や西沢淳男氏のまとめられた本が本書刊行以前にあったものの、簡潔に述べられている部分が多く、体系的にまとめられているものではなかった。このような点からいっても、本書が刊行される意義は大変大きいものであるということができよう。

本書は、幕初のまだ職制が確立していなかった頃、徳川家康の将軍就任（一六〇三）時の代官から、徳川慶喜が大政奉還を行うまで（一八六七）の期間に代官に就任した者総勢一，三七〇名の情報をまとめている。それだけではなく、一部徳川家康が関東へ入封した年（一五九〇）から就任した代官の情報も含んでいる。なお、家康の時代に代官頭として辣腕をふるった伊奈忠次・大久保長安・彦坂元正・長谷川長綱と、その配下となって職務を遂行した代官も採録しており、初期の職制がまだ確立していなかった時期の代官（あるいはそれに類する役職にある者）にも配慮をしている。こうした、幕初に見られる「代官」と呼べるかどうかあいまいな者もきちんと採録することによって、本書を調査・研究の用途に供する際に十分な情報を得ることができるようになっている。

特徴的な部分として、索引に代数を示す□数字が記されているという点が挙げられる。代官は、一代限りの任命であった人物もいたが、その一方で伊奈氏や江川氏など、何代にもわたって世襲で代官を任命された者（家）も存在する。それが一目でわかるため、大変便利になっている。欲を言ってしまえば通称も含めた索引などがあればさらに便利になったと思われるが、索引も本編も五十音順で並んでいるため、苗字部分を開いて内容を確認すればわかる部分でもあり、そこまでの不自由さは感じなかった。

代官個人個人に割り当てられた各項目としては、代官の生没年、父や母・兄弟などの情報、通称などが記され、さらに代官の任地や任期などの情報はもちろん、それ以前・以後の代官就任期以外の情報もあわせて載せられている。本書のはしがきでも、この点は「形式的な人名辞典とならないよう工夫した点」と述べられており、本書の特色の一つともなっている。ここからも、本書が単純に人名だけを並べた辞典ではなく、調査・研究のために作られた実用的な辞典であることがわかる。もちろん、史資料の残存状況などがあるため、記述量は必ずしも一定ではなく、詳細に記述されている者もあれば多くの事項が「不詳」となっている者も存在する。しかし、これはたとえ「不詳」であったとしても代官を務めていたことがわかる者についてはきちんと採録するという姿勢が貫かれていることの裏返しとも言える。

また、各項目の最後に【典拠・参考文献】欄を設けてあるため、その項目がどういった史資料や文献を典拠として記述されたのかが一目でわかるようになっている。ここで典拠や参考文献として挙げられているものは、前述の諸系図類は基より、各地域の県史や市史をはじめとした各地の史料、あるいは論文などの研究成果も盛り込まれている。このことから、一つの史資料を典拠とせず、考察を加えて可能な限り経歴を客観的に述べるなどの方法がとられている。このことからも、本書が単純に人名を羅列したものではなく、実証的な裏付けに基づいて執筆されたということを改めて確認することができる。なお、『寛政重修諸家譜』編纂より前の代官に関しては、この『諸家譜』の記述を典拠として記載しているが、一部表現を書き改めていることが「凡例」に書かれている。

ところで、辞典を作るにあたって外せないのが、五十音順で配列する以上、読み仮名を振らなくてはならないという問題であろう。『寛政重修諸家譜』といった、同時代の史料に掲載されている人物に関しては、そこから読み方を採ればよいため問題が無いが、そこに掲載されていない人物の読み方をどう扱うかという問題がある。本書では、読みのわかる者にはその読みを記し、そうでない者は原則音読みで表記を統一するという配慮が図られている。そのため、読み方に違和感を感じる部分も確かにあるものの、不正確な情報を掲載することによる質の低下、ひいては辞書そのものの質の低下を防いでおり、本書にたいする細やかな配慮を見て取ることができる。

本書の執筆に携わった方々は、編集に携わった四名も含めると、総勢三十三名にもおよぶ。いずれの方々も、現在歴史研究に携わっている、第一線の方々である。ただ、一つ残念なのは、本書の刊行前に、代官研究の第一人者でもあり、この法政大学の名誉教授

も務め、本書の編集委員長も務めていた村上直氏が、本書の刊行前に逝去されてしまったことである。本書は今後の代官研究をする上で欠かせない書物になっていることは疑いようのないことであり、それだけに本書の完成を待たずして逝去されたことは大変残念なことである。

これまで述べてきたように、本書は代官についての事績を余すところなくまとめた辞典である。そのため、幕領の代官の研究に必須なことは明白であるが、それだけではなく幕領全般の研究や、徳川幕府の支配体制を研究する上でも利用価値の高い辞典である。また、各自治体史を調べる際にも、幕領部分に限るとはいえ、大変便利な辞典であることは疑いようがなく、活用の幅は大変広い書物となっている。本書が刊行されたことで、より一層代官の研究および幕領の研究、そして江戸時代の幕府体制の研究がより進展していくことは明白であろう。

こうした点から、ぜひ研究者の方々だけではなく、近世史に興味のある方々などが手に取って、自身の調査・研究に活用されることを期待したい。そして、願わくば本書で「未詳」となっている部分が、本書の刊行を契機として、解明されていくことを願ってやまない。

（二〇一五年三月刊　A5版　五一二頁　定価一二〇〇〇円＋税　東京堂出版）